



20th CENTURY

アクション
ネクラース
テンドリヤコフ
ソルジェニツィン
アイトマトフ



20th CENTURY

世界文学全

20世紀の文学

世界文学全集

30

アクションノフ

星の切符

ネクラースフ

夏の終わり

テンドリャコフ

激 流

ソルジェニツィン

イワン・デニソビッチの一日

アイトマートフ

絵の中の二人

集英社

©本書は日ソ翻訳出版懇話会を通じて、メジ・クニーガ
(全ソ図書公団) の了解を得て、翻訳したものである。

© 1965 Shueisha



世界文学全集

30

アクショーノフ／ネクラースフ／テ
ンドリャコフ／ソルジェニツィン／
イトマートファ

昭和四十年十一月二十八日 印刷
昭和四十年十二月二十八日 発行

訳者 木村浩・草鹿外吉・原卓也

江川卓・小笠原豊樹

発行者 陶山 巖

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 凸版印刷株式会社

本文用紙 日本パルプ工業株式会社

表紙 東洋クロス株式会社

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話(265)六一一(代表)

振替 東京一五六五三

定価 五二〇円
(落丁・乱丁本は本社で
お取りかえいたします)

目次

アクションノフ

星の切符

ネクラースフ

夏の終わり

テンドリャコフ

激流

ソルジェニツィン

イワン・デニソビッチの一日

アイトマートフ

絵の中の二人

戦後とスターリン批判

木村 浩訳 三

草鹿 外吉訳 一八五

原 卓也訳 二八三

江川 卓訳 三三

小笠原豊樹訳 四五五

原 卓也 五〇一

星の切符

第一部

表か、裏か

第一章

ぼくは、素直な人間だ。「とまれ！」の赤信号を見れば、立ち止まる。そして、「すすめ！」の青信号になってはじめて渡るといふ始末だ。だが、弟となると、そうはゆかない。ディームカのやつはいつでも赤信号なんかおかまいなしに突っ走って行く。いつでも自分の気のむいた方向へ飛んで行くのだ。信号なんか、目に入らない。やっこさんがパン屋から塩化ビニールの袋に入った長い白パンをかかえて出てくる。一瞬、やっこさんはすぐピカピカに光った《ボンティアク》が町角へまがって行くのを見ていたかと思つたら、もう次の瞬間には車の流れの中に飛びこんでいる。ぼくは目の前に、やっこさんの、これはどうかと思われる斑点模様のチェコ製のシャツや、どこから手に入れたのかわからないジープンや、オーストリア製の短靴や、短いフランス刈りにしたロシア的な頭が、ちらつくのを見ている。どうやら、二台の《ポベード》と、《ヴォルガ》と《シコダ》(いすれも自
動車の名前)から無

事に身をおかしたかと思つたら、やっこさん、立ち番の民警に捕まってしまった。ぼくのうしろで、二人の婆さんがこんな言葉をかわしている。

「まったく心臓がとまっちまいそうだったよ。今時の気違ひどもにはまったくあきれてものがいえないよ」

「それにどうだい。あのズボンは裏返しにはいたんじゃないかい。ぬい目がみんな外にでているじゃないか」

信号が青になった。ぼくは通りを横切った。交番でディームカのやつがぶつぶつ返事をしている。

「身分証明書パスポートなんか持ってませんよ。お金もね……」

ぼくは五ルーブル支払ってやって、領収書をもらった。それから、ぼくたちは肩を並べて歩いて行つた。

「どうかしてるよ。民警にお金を払うなんて。ほんとに、どうかしている」と、弟が文句をいう。

「おまえはすぐにもひっぱられるところだったんだぜ」と、ぼくは答える。

「それがどうした。ひっぱられればよかったよ」

ディームカは口笛をふきながら、あたりを見まわしている。それからソーダ水売りの女に五カペイカ投げるようにわたして、《シロップなし》を飲んだ。ぼくは弟が飲み終わるまで待っている。それからまた歩きだし、わが家の近くへやってきた。

「学位論文のほうはどうなってるんだい。反対討論の連中は

もうきまったのかい」と、ディーム力がたずねる。

「ああ、きまったよ」

「いい連中かい」

「だれが」

「反対討論をするやつらさ——ちゃんとした連中かい？　ひでえやつらじゃないだろうね？」

「なに、最高にいい連中さ」ぼくは弟に調子を合わせて笑いながら、反対討論をする連中を思いだした。

「そいつあ、すげえや。おめでとう。おごってもらわなくちゃ」

ぼくらは家に入り、階段をのぼってゆく。

「きょうのおかずはなんだろうな」と、ぼくがたずねる。

「心配しなさんな。みんな兄貴の好物ばかりだよ」と、ディーム力が意地悪そうに答える。

「なにしろ、ぼくとママが二人して腕によりをかけたんだから。『ヴィーチェンカ(ヴィクトル)の愛称』はレバーが好きなのよ」と、

ママがいえば、さっそくぼくはレバーを買いに行く。『ヴィーチェンカはいまビタミンをじゅうぶんとらなくちゃいけないのよ』といえ、ねえ、兄貴、ぼくがまたそれを買に行くってわけさ。そうかと思うと、『あの子はかたくなったパンが大きいなのよ』ってなわけで、これまたぼくがパン屋へひと走りすることよ。わがソビエトの学者は、食べることに心配なしに安んじて研究に励んでいる。これこそわが国の

偉大な業績の秘密なのさ。ぼくはしがたないコックだけれど、学者先生のために、栄養価の高い食物をこしらえてさしあげますよ。ただなるたけ早く、宇宙に人間を打ち上げる方法を考えてくださいよ。それで、打ち上げときまったら、ぼくをまず第一に。ああ、ぼくはもうこんなことにはうんざりしちゃったよ」

弟のやつは陰気な皮肉をとばすようになった。ママは何かにつけてぼくを引き合いにだして弟をしつこくする。一家そろって食膳につくたびに、ママはぼくのことをほめそやす。ママにいわせると、ぼくはもう小さいときから勤勉と忍耐強さを発揮して、そのおかげで、いまじゃひとかどの人間になってしまったみたいだ。もっとも、親父のほうは、論文が合格していないことを暗にほめかして、『一人前に五分前』などといっている。すると、ディーム力のやつは、『学者にはなれなくても、せめて修士ぐらいにはならなくちゃ！』などと意地悪げにいつて、大声をあげて笑う。数年前、ぼくがマスター級の選手からなる水球チームのメンバーだったころは、ディーム力のやつもぼくのことを崇めたてまつっていたものだ。でも近ごろでは、ぼくに對する弟の態度にはまことに腑に落ちないものがある。いまも、ママにさんざん買いた物をやらされる、といってむくれているのだ。もちろん、ママを手伝うのは当然のことだ、とか、ぼくだってもっと家にいられたらママの手伝いぐらいするさ、とか、おまえは、勉

強をすっぱかして、オール三点で卒業試験に合格する気らしいが、これから先のこともあるんだから、そんなことではだめだ、もうちょっとがんばったらどうだ、ぐらいのことはないこともない。しかし、ぼくは弟に何もいわない。ぼくはただ笑って、やつを背をポンと叩いてやる。すると、十七歳の少年の顔には滑稽^{こっけい}としかうつらない憂うつな表情が消え失せ、弟は笑顔になって、いう。

「ねえ、おっさん、ぼくに二十五ルーブルくれないか」

ぼくは黙って弟に「二十五ルーブル」をくれてやる。

食事がすむと、ぼくは自分の部屋へもどり、窓辺に腰をおろして、ひげをそりはじめる。ひげをそりながら、時どき窓の外をのぞきこんでみる。庭の向こうの窓辺では、裁断師のイリヤおじさんが坐ってひげをそっている。また、ぼくの窓の下でも自由業、つまり、作家のフィリップ・グロムキーがひげをそっている。ぼくは自分の電気カミソリのスイッチを入れる数秒前に、彼のカミソリがうなりだしたのを耳にした。

ぼくらの住んでいる建物の中には四角い中庭がある。その中央には小さな植え込みがある。低くて暗いトンネルのような通路を通って行くと、表通りへ出る。一風変わったところのあるうちのパパは、客を送って中庭を通るとき、『パツツイオを通して行きましょう』というし、長い、まがりくねった廊下を通るときには、ここなら短剣一本あれば、一人の兵士

で百人ぐらいの敵はくいとめられますよ、などという。革命前、《家具つき貸間・バルセロナ》と呼ばれていたぼくらのアパートについてパパは皮肉ってそういつているのだ。いまから二十八年前、ぼくは産院を退院してくると、すぐここに住みついた。それから十一年たって、今度はデيلمカが生まれた。このアパートには、新しく引っ越してきた人というのはまれで、大部分はずっと以前から住みついている人たちだ。いま、アーチの下から年金暮らしをしているペーリスカヤ侯爵夫人が現われた。発酵^{カサエイル}牛乳のびんを手にしている。彼女のやせ細った足は防毒マスクのひだのついた筒のようだ。侯爵夫人は長いこと総合病院の受付で働いていたけれど、いまじゃ、すべての勤労者同様、その労をむくわれて、休息の日々を送っているのだ。

いまは、職場のひけどきだ。いかにも通信教育受講生らしいせわしそうな足どりで運転手のペーチャ・クラフチェンコが通っていく。《小間物屋》の売り子リユーシャとタマールが駆け抜けてゆく。つぎつぎにアパートの住人たち——店員、肉体労働者、それにうちのパパのような知的労働者が通って行く。うちのアパートの住人の中には過去の遺物を頑固^{がんこ}にすてきらない連中もいる。アル中のフロームフ、闇屋のデイマ、喧嘩好きなエリヴァおばさんなどがそうだった面々である。暗黒街の代表は最近《別荘》からもどってきたイーゴリ・クリューチニツクだ。

これらの人びとはすべて、自分たちの仕事を終えて、どこからともなく帰ってきては、四つのドアをくぐり、四つの階段を通って、暖かくうすぐらい、どこもみしみしいっている、もうだれにもすっかり愛想をつかされてしまっているのだが、やはり一家団らんの場合にちがいない、このいわば好々爺然^{こうこうぜん}として老いさらばえた《バルセロナ》の中へ入って行くのだ。

ぼくは電気カミソリのスイッチをきり、鏡の中の自分の顔をみつめる。

ぼくはちょうど二十八歳という年相応の顔をしている。どういうわけか知らないが、だれも、ぼくの年をいいあてようとして、間違えることはけっしてない。

窓の下でヒュー・ヒューと口笛が聞こえた。中庭を弟の友だちで同級生のアーリック・クラメルが散歩しているのだ。多くの所から、細い糸のようなわけ目で七・三にわけた髪の毛、眼鏡、首にまいた青年友好祭^{フュンド}のスカーフ、びったりしたジャンパーにつつまれた骨ばった肩が見える。ディーム力が姿を現わした。やつこさんはちゃんとスーツに蝶ネクタイをしている。弟とまったく同じような服装で、アパートの管理人の息子でバスケットボールの選手、のつばのユールカ・ポポフが近づいてきた。ぼくはやつと大っぴらに煙草を吸えるようになって、一服したときのえもいわれぬ心地よさがいまもよく憶えている。この少年たちもこれみよがしに家の前

で煙草に火をつけているところを見ると、どうやら、そのたのしみを味わっているようだ。しかし、連中ときたらすっかり伊達男^{だて}ぶっついていて、おちつきはらっていて、あまり口をきかない。実に滑稽だ。しかし、ぼくらにしたって、連中とたいては変わっちゃいなかったろう。

「調子はどうだい、ユールカ」と、アーリックがたずねる。

「ジェット機のガラチャンをやったかい」

「きみだって、ぼくのコーナーからのシュートは知ってるはずだろ」と、ユールカが答える。

「でも、やつこさんがセンターを突破したときのことも忘れられないね」

「今日はやつその動きを封じてやったよ」と、ユールカがいう。彼は新しいスーツのことも忘れて、自分と同じく混成チームの候補選手でライバルのガラチャンがバスケットのゴールへ近づいてゆく仕種^{ししゅ}と、自分が彼の動きをおさえるところを実演してみせる。アーリックはユールカに世界的に有名な黒人選手のウィルト・チェンバレンのようにやってみろ、と説得する。そこへディーム力が二人の話に割って入った。

「今晚のプランはできているのかい」

ユールカはネクタイをなおしながら、残念そうにいう。

「きょうは家に馬^{うま}がいるんでね」

馬とは父親のことである。馬がでかけてくれると、大喜びだ。連中は電話にとびついて、『場所ができたぞ！』と伝え

る。すると、同級生の素直な女の子たちがいそいそとやってくる。ダンスがはじまる。だれかが一瞬あかりを消す。野郎どもは忍びよって接吻する。女の子たちは悲鳴をあげる。

「喫茶店へ行こうぜ」と、ディームカが提案する。

「喫茶店だって！ おれには十ループルしかねえんだよ」とユールカが口笛をびつとならした。(この小説の時代は一ループルが九十円であつた)

「こちとらも財政困難でね。全部で十二ループル」と、アリクがいう。

「四十ループル」と、ディームカが無造作にいった。

窓の下ではみんなが口をつぐんだ。

「十五ループルはお袋がくれたんだ。あとの二十五ループル……二十五ループルはだなあ、きのう球つきをやってもうけたんだ」

「うそつけ！」と、ユールカがいった。

「信用しないのか。ある映画監督をまかしたのさ」

「その映画監督って、だれだよ」と、アールリクは驚いていった。いつもモスクワ映画社でエキストラとして出演し、自分でも脚本をかき、『わが映画界では……』などと大きな口を開いている彼のことだから、驚いたのもむりはない。

「若い映画監督だったな」と、ディームカはすましていった。「名前は忘れちゃった」

ぼくは窓から身をのりだす。

「やあ、今晚は、ジェントルメン！ おそろいでどこへ行こう

というんだ。ダンス・パーティーかい。それとも球つき？」ディームカの口から巻煙草が落ちた。ぼくはなぜか弟をちよつとからかってみたくてしかたがない。

「ヴィクトル、ディームカは球つきで映画監督をまかしたんだ、なんてほらをふいているんですよ」

「いや、確かにディームカ(ディームカと同じく)は大したもんだ。球つきで映画監督をまかすなんて、ちよつとやそつとじゃできないことだからね」と、ぼくは答える。

「なあに、それは監督によりけりですよ」と神秘的な顔をしてユールカがいった。

「いや、監督ならだれだって、そうだろうね。ねえ、アールリク、きみんとこの映画界の連中はこれをどう考えているんだろう。監督をまかすのはたやすいことかい？」

「事実上、不可能ですね」と、アールリクが答える。

「ところが、ディームカのやつはまかしたんだよ。兄貴として実にいい気分だね。きみたちもみなそうだといいいんだがね」

「ガールカがやってくる」と、ディームカがむつりした顔でいうと、こっそりぼくにむかって『口だしするな！』という身振りをした。

カタッ、カタッ、カタッ。ハイヒールをはいた、現代的なからだつきの年ごろの娘ガールリヤ・ポドロヴァが近づいてくる。ぼくはこのガールリヤが大変気に入っている。彼女があ

らわれると、あたりのものがぱっと明るくなる。ガーリヤがあらわれたら、なぜかディームカの顔まで明るくなったみたいだ。いつか、二人はこの窓の下でつかみあいをやったこともあるのに。

「今晚は、みなさん！」と、ガーリヤはいい、「今晚は、ヴィクトル」と、ぼくにむかって手を振った。

ぼくはガーリヤにはほえんだ。ディームカは怖い顔をしてぼくをみつめている。やつこさんは、ぼくが映画監督の話をづけけやしまいかと心配しているのだ。

「レディーは新しい服をお召しじゃないか」と、アーリクがいう。

「どう、お気に召しまして？」と、ガーリヤはいつて、マネキン嬢のようにくるりと一回転してみせた。

「ちようどよかった。今日は喫茶店へ行こうよ」

「ねえ、それよか、映画へ行きましようよ。あたし、封切りの《春のメロディー》がみたいのよ」

「ちえッ！ 相も変わらぬ紋切り型じゃないか！」と、アーリクが馬鹿にしきった調子でいった。

「でも、あたし見たいのよ！」

「アーリクのいうとおりさ。見たてしようにないよ。歌ばかりだもの。輪舞のメロディー、ダンス、それにキッスだけさ」と、ディームカがいった。

「じゃ、そのうえ何が欲しいっていうの」と、ディームカを

ながめながら、ガーリヤがたずねた。

「ぼくに、何がものたりないかだって」と、ディームカが当惑する。

「じゃ、アーリク、あんたにはなにがいのの！」

「心理描写さ」と、アーリクが口をはさんだ。

ぼくは少々ディームカのやつが可哀そうになった。アーリクは、自分が何を必要としているのか、このとおりちゃんと知っている。彼には心理描写が必要なのだ。ところが、哀れなディームカはそれを知らないのだ。とりわけ、ガーリヤにみつめられると、なおさらわからなくなってしまうのだ。

ユールカがポケットから硬貨を取り出した。

「それじゃ、なげるぜ」

硬貨は高く、ぼくの窓の近くまでとんだ。

「表！」とガーリヤがさげんだ。

「裏！」とディームカがさげんだ。

みんなが落ちた硬貨へかけよった。ガーリヤは愉快そうに笑いながら、手を叩いた。しかたがない。運というものだ。月並みで、心理描写のないその《春のメロディー》とかいう封切りのコメディーを見に行かねばならない。ぼくはガーリヤがディームカに『あんたは賭にについていないのね』とききやくのを聞き、ディームカがそれを聞いて顔を赤くするのを見た。連中がアーチの下をくぐりぬけようとしたとき、ぼくはどなった。

「ディーマ、そのコメディーの監督の名前を知らないかい？……」

ディーマは、アーチの下からとびだしてきて、家に帰ったただじゃおかないぞ、という身振りをした。

きょうは土曜日。ぼくはネクタイをして、シュールカとのデートに出かける。シュールカはぼくの許嫁だ。こんな時代おくれな言葉を使ってすまないが、ぼくにはこの《許嫁》という言葉が気に入っている。ぼくは町角でもたもたしてしまつて、車のはてしない流れをまたなければならなくなつた。シュールカはもう地下鉄から出て、むかい側にたっている。

ぼくは、彼女をじっと見ている自分に気がつく。ぴったりした赤い服に身をつつんだ彼女はほんとに可愛らしい。とっても可愛らしく、趣味のいいなりをしている。ぼくは、自分がこんなふうに、まるで赤の他人でもながめるように、彼女をじろじろながめまわす気がしなくなつたときに、はじめて彼女と結婚するだろうことを知っている。ちえっ！　いつまで待たなきゃならないんだ。この車の波ときたら、まったくやりきれない。道の向こう側で、どこかのちんぴら野郎がシュロチカをまるで馬でもみるようにながめまわして、ヒッヒッヒと笑つた。もう二人のちんぴらが近よつた。ぼくは急いで道路をかけたつた。

背の高い男がシュロチカの腕をとつたが、ちょうどそのとき、ぼくは肩で男をはねとばした。

「さあ、行きましょう。ヴィーチャ、行きましょうよ」と、シュロチカがいった。

ぼくは連中に向きなつた。三人ともネクタイのかわりに何やらひもを首にぶらさげ、なかの一人は小さな口ひげまではやしている。弟のディーマカのやつだつて、金輪際こんなひもきれなんかつるしたりはしないだろう。たとえ何をつけようと、こないやらしいひもだけは絶対につけやしないだろう。連中は、こちらの腕力をうかがっているかのように、ぼくをじろじろ眺めていたが、そのうち退屈してきたのか、何気なくそっぽをむいてしまつた。

ぼくたちは公園へ入つていった。ぼくはその赤い小径や、ととのつた花壇や、噴水や、白鳥が大好きで、並み木路をぶらついたたり、売店のそばで足をとめたりする。とにかく、公園のアトラクションはなんでも利用して、ビールを飲んだりする。シュールカといっしょに公園に行くのはたのしい。

公園の入り口のスピーカーのついた柱のそばに人だかりがしていた。どの人の顔もなぜか同じような表情をしていた。

「幾多の同胞がその貴い血潮を流したわが神聖なる国土を侵すものは何人（なんびと）を問はず哀れな運命にあうであらう。われわれはそのじゅうぶんな軍隊と諸兵器をもつて……」

ぼくはアナウンサーの声をかたむけ、まわりの人びと

の顔をながめる。それから、遠く暮れかたの空を背景に巨大な《観覧車》がまわっているのをながめる。その車輪のまわりの六十四個のかごの中では、人びとがのんきに声高く笑ったり、さもこわそうに悲鳴をあげたりしている。公園の奥からジャズが聞こえ、観覧車がまわり、謎めいた混合物のいっばいつまったばかりの地球全体が動く。公園が動き、それにつれて公園の中にいるぼくらも動く。あそこでは笑ったかと思つと、ここでは口をつぐんでいる。これらの動きの相互関係を調べてみたら。ジャズと交響楽。さあ、あそこには、火花があがつたり、巨大なロケットが飛びたつばかりの空がある。

第二章

われはアラビア文字にてかざられしこの町を愛す
 鍔におおわれ、おいさらばえてはおれど

黄金なすものうげなアジアは

円屋根の上に安らぐ——

という詩の一節をほくは、駅前広場の自動車のめまぐるしい流れをみつめながらおもいだした。ここ、橋の上から、この《アラビア文字でかざられた町》の大きな一角がみわたせる。駅は人の波を電車というポンプでやっつくみだしている。

る。自動車の流れははてしない。広場は、その不動の明滅する灯でまばゆく、地平線上には、胸幅の広い騎士たちがならんだように、巨大な家々がぼんやりとひかっている。ものうげなアジア！ 詩人よ、あなたは、われわれの町の昔の面影をみとめることはできないでしょう。ひとつ、通りを散歩してみましよう。少し気がひけるって？ 恐いのですか？ いや、あなたの気持ちはいくわかります。よそからやってきた人たちがこの通りに立ったときの恐れと当惑が、ぼくにはわかるのです。ぼくだってもしこの町を、かつては静かでアラビア文字にかざられていたことを忘れてしまっているこの町を愛していなかったら、やっぱり、恐れを覚えるかもしれないからね。

「さあ、行こう」と、ボリスがいう。「なんだってそうたちすくんでいるんだい。ぼくはきみがそうたちすくんだよな格好をしているのをみるのは嫌いだよ」

ぼくらは地下鉄へ降りていった。長いタイル張りのプラットホームを人波におしながされてゆく。ぼくらに向かつてもう一つの人波がおしよせてくる。耳をすますと、タイルの上を行く何百という足音が夏の豪雨をおもわせる。ふだん、ぼくらモスクワっ子はこんな音には気づかない。ぼくらはどぎつい刺激にしか反応しないからだ。ぼくはいま雨のことを考えている。たぶん、そのためにこの雨の音がきこえてくるのだろう。別荘からそう遠くないところで雨にやられ、びしょ

ぬれになって、みんながお茶をのんでいるヴェランダに駆けこんでいく。ぼくはそんな休日を夢みているのだ。

ぼくらは最寄りの駅でおりた。新聞売り場の列にならび、それからタバコ屋の列にならんだ。夕方はいつもそうだが、駅の近くの広場は若者たちでいっぱいだ。彼らは柵に腰かけたり、一団となって突っただっている。ニヤニヤしながら、地下鉄からでてくる連中をじろじろながめまわしている。娘たちの背後に野次や、時には口笛がとぶ。夕方のいちばんいい気晴らしは、地下鉄のそばでぶらぶらすることだ。

「やつらをみてごらんよ、あの面を。まったく、ぞっとするじゃないか」

「やめろよ、きみ。あたりまえのモスクワっ子じゃないか。ただ、お互い同士で見栄のはりあいをやっているだけのことさ」

「あたりまえのモスクワっ子だって！」と、彼は叫んだ。

「おい、きみはあの愚連隊の連中をあたりまえのモスクワっ子だなんて思っているのかい」

「もちろんさ！　ごく普通の連中じゃないか」

「馬鹿いえ、やつらはとんだ変わり者さ。大都会のかすだよ」

「おい、いい加減にしないか。ボリス！　うちのディームを知ってるんだらう。きみ？」

「それがどうしたんだ？」

「はっきりにいうけれど、やつこさんはごくあたりまえのモスクワっ子だぜ。やつこさんだってちよくちよくここで油をうってるんだ。きみが弟を知らなかったら、きっと、ほかの連中と区別がつかないだらうよ。そして、やつこさんもくそみそにやられてしまうだらうね」

「きみの弟のディームカがどうしたっていうんだい？」

「じゃ、ディームはどうなんだ？」

「ディームカだってやつらとそう変わっちゃいないよ。一つ穴のむじなさ」

「おい、いい加減にしないか、ボリス！」

「それがどうしたっていうんだ？　それじゃ、ディームカにはなにか生涯の計画とか、積極的な意欲とかといったものがあるのかね。なにか神聖なものを心の奥底に秘めているといえるのかね？　彼の頭の中にあることといったら、テーブルコーダーのテーブルとか、女の子のこととか、それに一杯やることだけじゃないか。あの卒業証書の成績のひどいことといったら」

「もう、いい加減にしろよ。弟のことはそれくらいでたくさんだ」と、ぼくはきつい口調でさえぎった。ぼくの友だちともあるうものが、なんてくだらない男になりさがったんだらう。ふん、変に気取りやがって。どうも面とむかつてずけずけいわずな気がすまない、とでもいいたいんだらう。

ぼくらはアパートに近づいていく。ボリスはぼくから本を

二、三冊借りてゆくことになっている。

「ねえ」と、ぼくはながい沈黙を破っていった。「きみはうちのディームカが何を考えているか知りたくないかい？」と、ぼくはまるで自分が弟の考えをよく知ってでもいるかのようだった。

「あの植え込みのところで十五分ばかり休んでいこう。弟はいつもこの時分にはあそこにいるんだ。やっこさんと話してみようよ」

「ぼくのいったことが気にさわったのかい？」とボリスがたずねた。

「ばかいえ。とにかくこの植え込みのところで少し休んでいこう」

ぼくらは《パツツイオ》へ出て、植え込みの奥の咲きみだれているライラックの下で、ベンチに腰をおろした。

わが《バルセロナ》は夕方のいつ時を送っている、モスクワ中のアパートと同じく。一階から三階まで、百の窓をもつて《バルセロナ》は自分の奥底をみつめている。カーテンのかげでは、人びとが動きまわり、テレビがさわがしい音をたてている。

中庭の反対側の隅のほうでゲーラとゴーラの二人が窓辺でテープレコーダーの調子をなおしている。やがて庭中を音楽でいっぱいにしてしまうだろう。すると屋敷番のお出ましと

なるわけだ。

アーチの下でヘッドライトがつく。中庭にま新しいタクシーが入ってきた。アパートのくずれかかった壁を背景に、二十世紀のエネルギーと快適さの結晶がここにある。

戸口から作家のフィリップ・グロムキーがしゃれたトランクをもってとびだしてきた。

「遠くへお出かけですか？」と、イリヤおじさんがたずねる。

「どきまわりですよ、みなさん。リガとかタリンとか、バルチック沿海に行くんですよ」

「フィリップ！」と、窓からうちのパパがさげんだ。

「海岸へいったらイオンをいっぱいすっておいでなさい。たっぷりとね。わしらのようなものにとっていちばんの薬ですからね」

「フィリップ・グリゴリーエヴィチ、なぜもっと早くリガに行くといってくれなかったんです？」と、闇屋のティーマが怒ったようにいった。

「講演のプログラムは前と同じものですか？ それとも、何か目新しいものをものになさったんですか？」と、運転手のペーチャ・クラフチェンコがいった。

「グロムキーさん、電燈料はお払いになったでしょうね？」と、エリヴァおばさんが如才なくたずねた。

《バルセロナ》はいま、その人気スターを見送っているとこ